

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04417

研究課題名(和文) 家庭科探究学習におけるプロセス評価モデルの検証 - 他国との研究連携による汎用化 -

研究課題名(英文) Validation of assessment methods focusing on the process of inquiry learning in home economics education : Generalization by means of collaboration with foreign researchers

研究代表者

綿引 伴子 (WATAHIKI, Tomoko)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：90262542

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：問題を多角的に検討する批判的リテラシーを育む問題解決学習に焦点を当て、その効果的な評価方法について、理論と実践を往還させながら検証することを目的として研究を行い以下の成果を得られた。1) 北欧および米国における批判的リテラシーを育む問題解決学習の授業の実際とその評価方法、評価の理論枠組みについて、授業観察や研究者・教師へのヒアリング調査をもとに資料を収集し分析した。2) 1) をもとに日本における批判的リテラシーを育む問題解決学習とその評価方法を開発し、実践をもとに検証した。3) 開発したプロセス評価方法については、小学校と高校のパフォーマンス評価、中学生のナラティブ分析による評価の検討を進めた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to validate effective assessment methods focusing on problem-solving learning in which students' critical literacy is nurtured while interacting the theory and practice. The main items and findings of this research are as follows: 1) analyzing lessons, assessment methods and structures of the theory on problem-solving learning in which students' critical literacy is nurtured in the USA and Nordic countries by means of school visits and interviews to teachers and researchers, 2) developing and validating a lesson plan and an assessment method in Japanese home economics based on the research in the USA and Nordic countries, 3) validating two kinds of assessments; performance assessments developed at elementary school and senior high school and an assessment analyzing narrative records by students at junior high school.

研究分野：教科教育学、家庭科教育学

キーワード：プロセス評価 批判的リテラシー 問題解決学習 家庭科教育 授業開発

1. 研究開始当初の背景

グローバル化や高度情報化が進展する社会では、持続可能な発展や各国協調による社会の安定と平和の維持は、全ての国にとって知恵を出し合って取り組む重要な課題であり、その実現のために、「現実の問題に直面した時、その解決のために知識を動員して推理する論理的な思考力や実践力」が問われている。

このような背景のもと、研究代表者・分担者らは、これまで10年以上継続して、批判的リテラシーを鍛え、思考力・判断力・表現力を培うための問題解決学習の理論構築とともにプログラム開発に取り組み、教育の必要性を実証してきた。これらの研究を通して、思考力や判断力の習得をどう測り評価するかの評価方法の開発も合わせて検討してきたが、評価方法の検証はまだ十分ではなく汎用性の検討には至っていない。評価については2000年代半ば以降パフォーマンス評価が注目されてきたが、数学など一部の教科を除き実践をともなった実証的研究は少なく、プロセス評価の研究はほとんど見当たらない。

2. 研究の目的

本研究は、学校教育の中で生徒に培いたい思考力、なかでも問題を多角的に検討する「批判的リテラシー」を育む問題解決学習に焦点を当て、特にその効果的な評価方法について、理論と実践を往還させながら検証することを目的としている。その際、これまで研究連携を行ってきた米国、北欧、日本各国の研究者および実践家と協働して検討する。研究代表者・分担者は、平成24年以降、問題解決学習におけるプロセス評価方法を開発してきた。本研究では、その成果をもとに、開発した評価方法について授業実践を通して検証し、評価方法の精度と汎用性を高める。

3. 研究の方法

本研究で明らかにする事項と研究方法は以下のとおりである。

(1) 北欧および米国の家庭科における批判的リテラシーを育む問題解決学習とその評価方法について、授業観察や研究者・教師への調査をもとに分析する。

(2) 日本における批判的リテラシーを育む問題解決学習のプロセス評価方法(枠組)を開発し、モデルプランを作成し提案する。また、米国、北欧の研究者や家庭科教師との連携を深め、プロセス評価方法へのアプローチを国際比較し、検討する。

(3) 日本における批判的リテラシーを育む問題解決学習とその評価方法について、実践をもとに検証し、海外研究者と共同討議のもとで共有化する。

4. 研究成果

(1) 北欧の家庭科における批判的リテラシーを育む問題解決学習とその評価方法の調

査と分析

北欧は子どもの主体的思考力を育成する教育を重視し、問題解決学習の実践に取り組んできており、現行シラバスやナショナルテストにおいて、独自のテストを開発し教育評価を組み込んでいる。一方、米国オハイオ州は、カリキュラム開発において先進的であり、米国で開発された問題解決学習である「実践的推論プロセス」とその評価を州カリキュラムガイドに反映させ実用化を進めてきた。このように両地域の取り組みは先駆的であり、本研究にとって有効な示唆となると考え調査を行った。

スウェーデン

2015年・2017年のスウェーデン現地調査により、批判的リテラシーを育む家庭科の問題解決学習について、スウェーデンのヨーテボリ市郊外のアレスコーレン中学校を訪問し、家庭科教諭 Sara Sjostedt 氏の授業を参観し、同氏にヒアリングを実施した。結果の一部は以下のとおりである。

1) 「家庭科」(家庭と消費者)は、「食物・食事と健康」「消費と金銭管理」「環境とライフスタイル」の3つの領域で中核的内容が設定されており、領域ごとに6段階の評価指標(ルーブリック)が示されている(表1)。

2) 各学習モデルは、「授業資料(ワークシートを含む)」「評価手順」「教師用手引き」の3分冊からなり、教育庁のウェブで公開され、家庭科教師が自由に閲覧できるよう設定されている。

3) 2011シラバスへの改訂後、作業部会のメンバーが講師となり、各地区の家庭科教師への説明会が開催された。学習モデルの活用は強制ではないが、多くの教師は各学校の生徒の実状やカリキュラムに応じて柔軟に活用している。

4) 学習モデル『タコスの夜』、『持続可能なランチ』のいずれにもパフォーマンス課題が組み込まれている。モデル『タコスの夜』は、スウェーデンの家庭でよく作られるタコス料理について、「健康」「経済」「環境」の3つの視点から食材を選択し、その選択を生徒同士で検討・改善するとともに、その食材で各自が調理し、結果を省察・評価するという学習である。またモデル『持続可能なランチ』は、同様に3つの視点を考慮して献立を各自で作成し、食材を選択して調理し、省察・評価を行うものである。『持続可能なランチ』は『タコスの夜』に比べ、メニューや食材選択の幅が広いと、生徒の思考や体験のスケールはより大きくなる。

5) 教師用手引きには、学習モデル授業の評価基準であるルーブリックが示され、「健康」「経済」「環境」の視点からの生徒の記述例が詳細に掲載されている。生徒の思考・判断や論理的な表現力をどう測るか、教師の理解を助ける手立てがとられている。

6) 面接調査からは以下の点が明らかになっ

た。パフォーマンス評価の困難さ乗り越えるにあたり、とりわけ生徒の記述について教師が評価するうえで、本学習モデルは有効である。学習モデルを組み込んだカリキュラムを実施することを通して、生徒に考えさせ自主的に活動させることに目が向くようになった。このことから学習モデルの実践を通して、生徒主体の授業づくりへ、教師自身の授業観が変化したことが伺われる。

表1 「家庭と消費者」シラバスにおけるルーブリック（消費・生活経営領域における知識・活用の評価指標（9学年）

水準	Grade E	Grade D	Grade C	Grade B	Grade A
知識	消費の選択方法について比較し、個人経済への影響について 基本的な 考慮ができる。	グレードEの知識が十分に獲得され、かつグレードCの 大方 の知識が獲得できている。	消費の選択について比較し、個人経済に 相対的に良く 適合する商品を選ぶ発展的な考慮ができる。	グレードCの知識が十分に獲得され、かつグレードAの 大方 の知識が獲得できている。	消費の選択について比較し、個人経済に 良く 適合する商品を選ぶ十分に発展的な考慮ができる。
活用	消費者の権利と義務について 基本的な 理解、実践をすることができ、状況に応じてそれがどう適用されるかを例示できる。		消費者の権利と義務について 発展的な 理解、実践をすることができ、状況に応じてそれがどう適用されるかを例示できる。		消費者の権利と義務について 十分に発展的な 理解、実践をすることができ、状況に応じてそれがどう適用されるかを例示できる。

7) パフォーマンス評価を取り入れた実践事例

題材名 「持続可能なランチ」全 320 分
実施校 アレスコーレン中学校（ヨーテボリ）

対象学年 9 年生、 Sara Sjostedt 教諭

授業構造 3 段階構造

1) 計画：献立作成 180 分

家庭科シラバス全体を貫くキーワード「持続可能性」（「健康」「経済」「環境」の 3 視点）に配慮した献立を各自で考える。

2) 実施 80 分

自分で考えた献立をもとに調理から片付けまで 1 人で実行、ペアの相手が観察・記録・相互評価（写真参照）



3) 省察 60 分

実習について省察、自己評価（学会発表 1 他）

フィンランド

2015 年のフィンランド現地調査では、フィ

ンランドの教育庁（The National Board of Education）を訪問し、家庭科教育担当指導主事 Marjaana Manninen 氏とフィンランド消費者協会（The Finish Competition and Consumer Authority）のシニアアドバイザー Taina Mantyla 氏、およびヘルシンキ大学の教授 Kaija Turkki 氏にヒアリングを行った。2017 年の調査ではヘルシンキ大学の Hanna Kuusisaari 氏へフィンランドの新シラバスについてヒアリングを行った。また、ヘルシンキのベサラン義務教育学校、カータノンコスケン義務教育学校において家庭科の授業参観および教師へ実践内容、評価についてヒアリングを行った。以上の調査により、能力ベースの新カリキュラムの理念と構造、家庭科カリキュラムの特徴について、以下のことが明らかとなった。

1) 2016 カリキュラムにおける教育理念とコンピテンス

2016 年 9 月より施行された新カリキュラムでは、生徒が人としてまた市民として成長するうえで不可欠な能力として以下の 7 つのコンピテンス（能力）

・思考力と学習力、
・文化的コンピテンス・相互関係力・表現力、
・生活自立力・日常活動の管理・安全性、
・多元的読解力、
・ICT コンピテンス、

・職業に必要な能力や起業家精神、
・社会

への参加と影響力・持続可能な社会の構築

が提示された。そのうえで、これらの能力は

すべての教科、科目で横断的に身に付ける能

力とし、カリキュラムの構造化がなされた。

また、学校を総合的な学びのコミュニティと

捉え、学校文化を成り立たせるために必要な

要素として、安全性とウェルビーイング、多

様な文化・言語の尊重、環境への責任と未来

への志向、多目的な活動や協力・協働の促進、

参画と民主主義の推進、公平性と平等の推進、

等を提起した。

2) 2016 カリキュラムにおける家庭科の目標、

コンピテンス、評価

新カリキュラムの最も大きな特徴は、教科

ごとに生徒に付けたい力を具体的な学習目

標として項目ごとに示し、各項目に対応する

学習領域やそこで獲得する横断的コンピテ

ンスを構造的に示している点である。学習目

標は、実践的な日常生活スキル（5 項目）関

わり合い協働するスキル（4 項目）情報管理

スキル（4 項目）の計 13 項目で構成されて

いる。表 2 は実践的な日常生活スキルについて、

目標、内容、能力の関連を示したものである。

また、学習領域は、

・食に関わる知識・ス

キル・食文化、

・住居と協同生活（被服管

理や生活時間管理、家事分担を含む）、

・消費と家庭経済（生活情報を含む）の 3 領域で、

北欧諸国の家庭科の中では最も包括的な内

容を有している。学習評価についても、目標

やコンピテンスとの関連が重視され、生徒が

家庭科のコンセプトをよく理解し、家庭科の

学習内容を活用しているかどうかの評価の

観点とされている。科目設定の最終学年にお

いて、国の定めた評価基準をもとに最終評価が行われる。

以上より、新カリキュラムにおいて、教科の学習目標、内容と、横断的コンピテンスとの関連が構造的に示されたことは、家庭科教師にとって新たな教科理解と授業実践の契機となることが予想される。同時に、全科目に共通な7つのコンピテンスの一つとして「生活自立力・日常生活の管理・安全性」が盛り込まれたことは、生活教育を重視するフィンランドの教育理念が反映されたものと考えられる。また、その能力の獲得に中心的に関わる家庭科の意義や可能性が、教科全体の中でより説得力を持つものになったと推察される。(学会発表2)

表2 家庭科の授業目標(スキル)と学習内容、教科横断的能力との関連
＜実践的な日常生活スキル＞

授業目標(実践的日常生活スキル)	学習内容	教科横断的能力
1 計画し、組織し、実践し、その結果を評価することができるようになる	c1 食生活の知識スキル・食文化 c2 住生活と共同生活 c3 消費と家庭経済スキル	T3 自己管理と日常生活の運営
2 家庭生活を営むうえで必要な生活スキルを身に付け、創造的で美的な生活への関心を高める	c1 食生活の知識スキル・食文化 c2 住生活と共同生活	T2 文化的理解力・相互関係力・表現力 T3 自己管理と日常生活の運営
3 材料や道具、設備、情報やコミュニケーション技術を、生活の向上や持続可能な消費のために活用する	c1 食生活の知識スキル・食文化 c2 住生活と共同生活 c3 消費と家庭経済スキル	T3 自己管理と日常生活の運営 T4 多元的読解力 T5 ICT活用力 T7 社会への参画および持続可能な社会の構築
4 有効な時間の使い方や仕事の段階を理解し、計画、遂行できるようになる	c1 食生活の知識スキル・食文化 c2 住生活と共同生活	T1 思考力と学習力 T3 自己管理と日常生活の運営 T6 職業に必要な能力や起業精神
5 衛生や安全に配慮し、資源の有効活用が実行できるようになる	c1 食生活の知識スキル・食文化 c2 住生活と共同生活 c3 消費と家庭経済スキル	T3 自己管理と日常生活の運営 T5 ICT活用力 T6 職業に必要な能力や起業精神

(2) 米国の実践的推論プロセスとその評価

2016年に米国オハイオ州の家庭科における問題解決学習である実践的推論プロセスの実際とプロセス評価を明らかにするため現地調査を実施した。オハイオ州コロンバス市の家庭科教諭 Marybeth Motasem 氏の勤務校ベックレイ高校において、高等学校家庭科、食物領域と住居領域の問題解決学習を参観し、新カリキュラムやプロセス評価方法についてのヒアリング調査と文献収集を行った。

また、2017年に来日中の元米国家族消費者学会会長の Marilyn Swierk 氏へヒアリングを行なった。長年にわたり理論をもとにした豊富な実践経験を積んできた地域と連携したサービス・ラーニングにおける実践的推論プロセスおよびプロセス評価について資料を入手した。生徒の活動のプロセスを丁寧に振り返る方法論として PARCA (パーカ) (Preparation, Action, Reflection, Celebration, Assessment) が提案されていた。また、評価については、学習活動の協働性、活動の有効性、生徒自身のポートフォリオ評価、自己評価、今後の課題や展望の明確化など、多面的な評価方法が実施されていた。

実践的推論プロセスについて、評価の理論的枠組みを整理するとともに、中学、高校の

教育現場で実際どのような評価方法が実践されているかを授業内容とともに調査した。現在、分析を進めているところである。

(3) 日本における批判的リテラシーを育む問題解決学習とそのプロセス評価方法の開発、モデルプランの作成・提案、検証

スウェーデンの問題解決型の授業「タコスの夜」「サスティナブルランチ」をベースにした日本版を開発し、大阪教育大学および金沢大学で実施し検証した。

大阪教育大学の実施概要

内容：「食生活」に関わる教材研究の一環として位置づけ

日程：2017年5月～6月 90分+家庭学習(課題)

対象：25名(教育実習前の2・3年生)

方法：

事前学習；5月8日の授業の一部で、パフォーマンス評価について、スウェーデンの家庭科とともに紹介(10分程度)

前時に関連資料(パワーポイントの印刷)を配布して、5/8の復習

家庭学習として「献立の作成に必要と思われる資料」及び、「献立作成に関わるワークシート」を事前に考えて持参すること

第一段階の「計画・献立作成」に取り組む

スウェーデンで使っている資料を配布・解説

振り返り

考察：受講生は関心をもって活動に取り組んだが、教育実習前の学生が対象だったこともあり、パフォーマンス課題自体の認識が不十分だったため深まりが弱かった。問題解決型の授業経験の有無で、ワークシートの完成度に違いが見られた。評価の意義を理解するためには、振り返りの時間をもう少し確保する必要がある。

金沢大学の実施概要

テーマ：サスティナブルランチ 日本版

日程：2017年12月～2008年1月

対象：大学3年生9名・4年生7名(4名×4グループ)

授業のねらい：

生徒の立場と教師の立場を体験しながら

・パフォーマンス評価について理解する

・教材 サスティナブルランチ の効果と課題を考察する

方法：

・パフォーマンス評価について説明、スウェーデンでの実践紹介

・ルーブリック案の作成(個人)

・<健康><経済><環境>(health, economy, environment)の観点について、ルーブリックを作成(個人 グループ 全体)

・グループで、サスティナブルランチの計画

・サスティナブルランチの調理実習

・調理実習レポートの作成(グループ)

- ・実習内容と評価の各グループ発表（表3）
- ・ループリックを利用した相互評価
- ・修正ループリックの発表（グループ）
- ・授業のふり返り（グループ）
- レポート（個人）提出

考察：事後アンケートの分析の結果、ほとんどの受講生はパフォーマンス評価について理解し、本実践は教師として役立つ学習であると評価していた。また、サステナブルランチの教材に関心をもって取り組んだ。特に、各班でのサステナブルランチの検討と調理実習、班同士の相互評価への興味・関心が高かった。

表3 サステナブルランチ 評価シート

観点、基準	健康 (栄養バランスと健康)	経済 (価格と品質)	環境 (環境への影響)
A	1.五大栄養素が含まれている 2.一汁三菜が含まれている 3.食材を購入する際に、原材料表示を見て、健康によりよい方を買う	1.予算内(500円/人)である 2.旬の食材が1つ以上含まれている	1.原材料の半分以上が国産かつ県内産1品以上である 2.廃棄量(生ごみ+食べ残し)が50g未満である
B	1.三大栄養素が含まれている 2.一汁二菜が含まれている 3.食材を購入する際に、原材料表示を見て買う	1.予算内(500円/人)である 2.旬の食材がない	1.原材料の半分以上が国産である 2.廃棄量(生ごみ+食べ残し)が50g以上100g未満である
C	1. 2. 3.	1. 2.	1. 2.
	1.栄養 2.献立 3.表示	1.予算 2.旬	1.産地 2.廃棄量
A			
B			
C			
合計	A = 個 B = 個 C = 個 /7項目中		
文章による評価 (具体的に)	<模範>	<模範>	<模範>
	<アピール、こだわりなど>		

以上より、探究学習およびそのプロセス評価をパッケージ化した本モデルは、家庭科の探究学習とその評価方法を理解するための教員養成課程の授業教材として、または現職教員のリカレント教育の教材として有効であることが明らかとなった。なお、対象は教育実習後の学生が適していると思われる。今後は、さらに改善をして中学校や高校での実践を通して本モデルの有効性を検証する。2018年度には高校で実践予定である。

本研究の課題としては、他国の研究者や実践家との協議により、さらに検証を進めることである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計16件)

- 1 鈴木真由子、問題解決型の学習を取り入れた授業、小学校家庭科教育法、建帛社、2018、159-167、(査読無)
- 2 荒井紀子、「深い学び」を達成する家庭科の

授業とは、学校教育、広島大学付属小学校学校教育研究会、2018年2月号、No.1206、2018、6-13(査読無)

3 綿引伴子、五感で学ぶ授業 - 実物を用いる -、小学校家庭科教育法、建帛社、2018、141-148、(査読無)

4 鈴木真由子、学習指導要領の目標と内容構成及び他教科との関連、小学校家庭科教育法、建帛社、2018、31-39、(査読無)

5 Noriko Arai, "Lesson Study in Home Economics in Japan: Possibility and Future tasks", International Conference Report, "Toward Quality Improvement in Home Economics Education: Bridging Japan and the world through perspectives on lesson study", The Research Group of Lesson Study in Home Economics, 2018, 23-31(査読無)

6 綿引伴子、家庭生活の社会的変化と家庭科教育の歴史、小学校家庭科教育法、建帛社、2018、21-30、(査読無)

7 綿引伴子・山川岳、男性家庭科教員増加に向けての課題、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター、教育実践研究、第43号、2018、1-13(査読有)

8 滝口圭子・綿引伴子他7名、みそ汁作りを中心とする幼小中連携活動を幼児はどのようにとらえたのか：活動後のクラスでの話し合いから、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター紀要 教育実践研究、第43号、2018、15-26(査読有)

9 荒井紀子、諸外国の家庭科教育 8 北欧の家庭科：消費者市民教育の展開、家庭科、全国家庭科教育協会、平成28年度第5号、2017、16-19(査読無)

10 荒井紀子、学習指導要領改訂における教科の役割：家庭科の視点から - 家庭科の学びを通して資質・能力をどう獲得するか、教科教育学会誌、第39巻第3号、85-90、2016(査読無)

11 荒井紀子、家政学概論と家庭科教育をつなぐ - 生活の変革とその担い手を育てるといふこと、日本家政学会家政学原論部会、家政学原論研究 No.50、2016、48-53(査読無)

12 綿引伴子・竹田有友子、高校家庭科におけるジェンダー・セクシュアリティの授業実践の分析、金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要、第8号、2016、35-47(査読無)

13 綿引伴子他8名、デジタル絵本でつながる幼小中高連携活動 1：活動概要と担当教員・観察者の評価、金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要、第8号、2016、49-60(査読無)

14 滝口圭子・綿引伴子他7名、デジタル絵本でつながる幼小中高連携活動 2：児童・生徒の評価、金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要、第8号、2016、61-69(査読無)

15 荒井紀子、諸外国の家庭科教育 - 全体の概論 -、家庭科、全国家庭科教育協会編、平成27年度第1号、2015、11-16(査読無)

- 16 荒井紀子、家庭科で育む市民社会を拓く力 - 行為主体に焦点をあてて -、市民社会をひらく家庭科、ドメス出版、2015、8-27 (査読無)
- 17 荒井紀子、高等学校学習指導要領実施上の課題とその改善 (家庭)、中等教育資料、2015、22-27 (査読無)

〔学会発表〕(計2件)

- 1 荒井紀子・鈴木真由子・綿引伴子、フィンランドにおける教育改革と家庭科 - コンピテンスと授業目標・内容、評価 -、日本家庭科教育学会 2017 年度大会(第 60 回大会)、2017.6.25、東京
- 2 荒井紀子・鈴木真由子・綿引伴子、スウェーデンの家庭科教育における「真正の評価」 - 子どもの主体的学習とパフォーマンス評価の構造を視点として -、日本家庭科教育学会 2015 年度大会(第 58 回大会)、2015.6.28、鳴門

〔図書〕(計5件)

- 1 大竹美登利・鈴木真由子・綿引伴子(編)、鈴木真由子・綿引伴子他 8 名、小学校家庭科教育法、建帛社、2018、181
- 2 愛知県立大学教育福祉学部教育発達学科(編)、綿引伴子他 27 名、小学校教育実践の基礎と展開、2017、クイックス、196
- 3 綿引伴子他 7 名、高等学校家庭科 [家庭基礎] 「家庭総合」教科書準拠 学習指導書ワークシート + デジタル資料セット、開隆堂 2017、186
- 4 Eija Kimonen and Raimo Nevalainen (Eds.), Reforming Teaching and Teacher Education, Anna-Lisa Elorinne, Noriko Arai, Minna Autio, "Pedagogics in Home Economics Meet the Everyday Life- Crossing Boundaries and Developing Insight" (145-168), Sense Publishers(Finland), 2016,268
- 5 大学家庭科教育研究会(編)、荒井紀子他 16 名、市民社会をひらく家庭科、ドメス出版、2015、214

〔その他〕

- 1 荒井紀子・鈴木真由子・貴志倫子他 5 名、グローバルな視野で世界の家庭科をつなぐ レッスン・スタディを中心とした日本からの発信と交流、日本家庭科教育学会課題研究報告書、2017
- 2 荒井紀子、日本と北欧の家庭科とジェンダー (2-21)、新潟県教育総合研究センター第 4 研究委員会、「教育における自立と共生学校のジェンダー」研究委員会報告書、2016

6. 研究組織

(1)研究代表者

綿引 伴子 (WATAHIKI, Tomoko)
金沢大学・学校教育系・教授
研究者番号：9 0 2 6 2 5 4 2

(2)研究分担者

荒井 紀子 (ARAI, Noriko)
大阪体育大学・教育学部・特任教授
研究者番号：9 0 2 1 2 5 9 7

鈴木 真由子 (SUZUKI, Mayuko)
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：6 0 2 4 1 1 9 7